THE LADIES' JOURNAL OF EDUCATION.

驛遞局認可

明治十九年八月二十五日

定價金四錢

女學雜誌

第三十四號

每月三回發行

績文舍

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

目録

●〔女學叢誌〕春のや主人の小説（春のや主人稿）●〔中外新報〕十二件●〔學藝一斑〕水の事○理學一斑●〔對譯〕●〔列女傳〕尼松月の傳●〔雜記〕毛髮の事○造作なし貸家○反古嘂○源氏の物語釋解（半可通人）●〔新作物語〕巣守の妻（春のや主人稿）●〔家政要報〕主婦の心得●〔御伽草〕作者ぴいき外四件●〔寄書〕婦人涅齒の由來○長歌其他短歌詩各一首

◎女學叢誌

春のや主人の小説

春のや主人　稿

斯る奇異なる題掲げ出さば讀者ハ定めて駭き給はん誤植にやと思ずもあらん手前「むむし」かと嚬を給ふもあるべしさるハ双ながら勘違へにて侍れ主人が此ところにて申さむずる事ハホンの私なき正當のむはなし其一部分ハ小説の講釋さてまた一部分ハ主人の本意ろれをあらかじめ申してをくのミ

近く一二年のむのしまでハ稗史小説が君子に忌まれて道義を紊るものと罵しられしも如何なる雅びたる風の庇にや輓近小説が舞昇りてやう〱世の人に崇られ慕はれおさなき乙女達を誨へまゐらそ女學叢誌やうの雜誌にだに公然たち現るゝ事とハなりけれ小説稗史にして精靈ありなばいかに榮ありとしも喜ぶらんさハあれ叢誌やうの雜誌物ハ本來教育を目的としてむさく修身の模範となるべき議論文章をのミ嗜むるもの故所謂小説も雇ひ出されて件の方便に列る限りハ多少教誨の便宜を思ひて醜き事柄ハ語らざるやうに耳苦き筋ハ取除くやうにと斟酌する所がなうてハ叶はず勿論小説の本意よりいふも所謂爲永派の小説の如きハ決して許しがたき部類にしあれどさりとて直接の勸懲を主眼とせず直ちに教ふるを目的とせずば間々艶めいたる談話を寫しもさてハ淫佚なる風俗を識りて醜き情態の一斑を描くも強ち咎るまも及ばざるのミの其寫す所眞理に適はゞこれらもなかく〱にめで度事なり謚し小説ハ哲學と均しく眞理を發揮するを主髓となす故敢て教育家の奴となりて本意を曲る事を要せざればなりさいいへ苟にも雇ひ出れて教化の方便となりたる限ハ最早我儘のみいひ張るべうもあらず幾らか其主意を奬誨に則り「美術の本願を汚さゞる限ハ」教化を助るやう力むべき事なりされば未熟なる主人の如きも十分此旨を腦裡に奉じて拙き小話譚をものする事なり但し曲亭派の勸懲主義ハあまりに淡々しきこしらへものにて（屢々他の所で論じたりし如く）美術の眞髓に違背したるも[illegible]の故主人ハ彼の主義を學ぶとを得せず故に主人事ハ「總稿の上に暗に奬誡の意を寓して」かゞあき乙女達を導かんとを願

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ひ敢て各章の文の上に皮相の奨誡を下さゞる事なりさりとて淫猥なる話に類する醜き事柄を寫し出それ寔に危険なる事なる故かて其様なる筋よ至れば之を文外にしらしむるやうにし暗よ誡むるを主とするなり「巣守の妻」の如きハ始ハ何とやらん卑げなれど次第に高尚なる人情に入るべく万一讀者にして活眼あり.なば或ハ悟り給ふ所もあるべし斯いはゞ天狗よ似ゝりと又もや外よりして叱らるゝかもしらねど敢ておのが作に謾するにハあらず主人の本願を申し述るまでにて果てさる力のあるやなしやハ全尾の後ならでハ主人もえらず爭か讀者も之を知るべき然るに怪しきかな某新報の記者ハ主人の不奏功を見透し給ひてや主人のものしたる小話の如きハ女子の敎育にハ害ある者ぞト公言せぬばかりにいハれたりき知らず何事を標準として斯る算盤を彈かれけん春の舍主人の事ハ更にいはず叢誌の面目よも係るべしと思ふ斯てまた同じ記者ハおのれが綴りたる小話を指して「人情を穿ち過る」となんいはれたるハ抑もまたいかやうなる事を指すや主人の小説ハ「人情以上」即はち「非人情」の稗史なりといふにや知らず何の點が非人情なるや一應聞て見たう思はるゝぞかし記者ハ雅眼よ富む人とし聞けば思ふに勧懲を表面に寫せる種彦馬琴等の小説稗史を至妙のものなりとハ得もいはれじ將又猥褻なる文辞だよなくば普通の人情を穿つ事を醜き事なりとハいひ難かるべし然らば主人がものしたる章に果して非人情の醜話ありや果て猥陋なる文辞ありしや敢て大方よ質さんとするなり万一我ものせる「巣守の妻」が敎化に害ありと定まらんよハ頗る諷誡に意を用ひし笠頓の作もヂケンスの作も又ハ大方の女史の作も總て不道徳の小説なり英佛獨等の小説にして極めて旨味なき作の外ハいづれも有害なる文辞となるべしかくいへばとて主人事ハおのれが拙作を譏られたるもの殊に角芽だちて論ずるにハあらず記者の品評の當らざるを(否)其意味の解しがたきを(否)其不公平なるを怪しむのみ若夫主人の拙作が叢誌を害して江湖の乙女子を誤るや非ずやそれらハ讀人に任せんのみ輿論果して主人を叱らば主人ハたちどころに筆を止めん輿論よ乞ふ答辞を與へよ

◎中外新報

○皇后宮の御服装

皇后宮にハ自今御場合に依てハ西洋服装を遊ばさるべき旨ハ兼て承はり及ぶところなるが去る十日今度本邦へ来遊ありし澳國帝室附の音樂師レメニー氏を宮中

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

に召されろの音樂を聞召されし節ハ純然たる西洋服裝を遊ばされたるよしに承ゝると去る十四日の日々新聞に見えたるが斯く畏こき御わたりにても服裝の改良に御こゝろを寄させ給ふまとなれば世の婦人達も此御心を體し奉り頭飾服裝の改良を實行するに躊躇ふこととなかるべし

○婚姻の打米　先頃の時事新報に米國大統領の婚姻の時見物人が新夫婦ヱ米粒をうち附けたるよしなるが之ハ英米などにてハ婚姻の當夜ろの親友等が申合し結婚の式を行ふ教會またハ會堂の外に持伏なし新夫婦が式を終り出るや否兩人を目懸て米粒の雨を降らし笑ひ興ずるの例なりとかいふと掲げありしが今英國婦人重寶雜誌の記者(ワレンといふ婦人なり)が人の問に答ふとて米粒の打方を掲げたるを見るに婚禮の時米粒を打附るにハ甚だ注意すべきとにて除り高くうちて新夫婦の眼を害しあるひハ項の廻りに落かゝりて衣服の中に入り心持ち惡のふしむるなどのとゆめ〳〵あるべのらず打米をなすハたゞ「澤山」といふ意味を表するまでの式にて古昔羅馬時代にハ新郎の頭およひ新婦の覆面の上より精げたる小麥を注ぎゐけたるが移り換りて當時ハ米を打つととなれり元來打米の法ハ米を上鞋に盛りて新夫婦に投げ附るを正當なりとせり鞋を投附るとハ經典中に「エドムを越えて我が鞋を投げん」といへる本文あるより來りたるにて夫たるものハ妻よりも力ありといふ表號なりともいひまた古昔の猶太人中にハ新婦の兩親ハその娘に對する一切の權利を放棄するといふ意味を示すが爲え古き鞋を新夫婦に投附たる風習のありしより今ヱ傳はりたるなりといへど何れか是なるを知らずとありたり

○女官方の豫防　目下惡疫流行につき后皇宮山御所明宮御殿に仕へらるゝ女官がたハ外出は勿論父母親族たりとも面會を禁ぜられたるよし本月十八日の日々新聞に見ゆ

○婦人の醫學士　この程マリー、エミリー、ダウソン夫人といへるハ四日間の試驗にて愛蘭土醫學校の卒業証書を得たり愛蘭土にて婦人の醫學者を出したるハ此婦人が初めなりろの夫ハ蘇閣土にて夫人ハ倫敦婦人醫學校にて教育を受けたる人なりといふまた米國紐育の婦人學校教官長ブラッウエルといへる婦人ハ醫學博士にてドクトルの稱號を得たる人なるよしにきく

○共立女子職業學校　神田區錦町二丁目に取立つる共立女子職業學校ハ裁縫、編物、刺繍、造花、押繪、組糸、紙細工、嵌細工、玩具、洗濯、圖畫等の諸術を教へ兼て讀書、習字、算術、家

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事、料理の諸課業をも授くるよし日々新聞に見えたるが尚は聞く所によれバ同校ハ來月より開校する筈にて入學せんと欲するものハ本月三十一日までに神田猿樂町三丁目の假事務所へ申込む事なるよし

○婦人大學校に入る　去る六月試験を受けて英國カムブリッヂ大學校に入りたる婦人ハ博物學科第一級に二人二級に二人中古および近代博言學科第一級に四人二級に一人。歴史科に第一級六人二級八人。理學科に第一級一人二級二人なりしと聞く

○英國よりの來信　英國に留學せる友人より此程記者の許へ達したる手紙の中に(前略)歐洲にてハ婦人の人口年々に增殖せりとて英國などにてハ婦人に職業を與ふるの會甚だ多しと聞くその結果なるにや近頃新聞紙を見るに男子ハ追々婦人に職業を奪はれ困難に陷るもの益々多しと有之小生が考へにハ職人を雇ひ入るゝ方にても婦人ハ男子よりも勤勉なりとて好むべく殊に婦人の給料ハ男子よりも安く且つ藝能も種類に依りてハ男子よりも精巧にして綿密なるべきがゆゑに追々男子が職業を奪さるゝハ當然の事と存候扨又婦人の職業に付思ひ出し候ハ倫敦に婦人速記法講習會といふが有之目下會員の數百八九十人と承り候この會員中にハ少し學問も出來る婦人ありと見え先達而新聞紙に出たるにハ同會員のウヰリヤムス孃といふハ能辨の由にてスピーキ、ゼ、ツルッス(信を語るべしといふ事ならん)といへる題にて演説をなし會員一同にて之を筆記したりとありたり總て婦人にハ下等のものにも案外に學問技藝有之我々日本人が雜婚說を唱へ歐米の婦人を娶らんとするも今日の日本人の有様にてハ提灯に釣鐘不緣どころか先方にてハ取り合ひ申間舗と存候既に歐洲の男子すら逐ひ捲ふれ候勢ひなるに況して我々日本人をや云々

○音樂の上手　目下倫敦にて第一等の音樂の上手と呼ばるるハ近ごろまで宮中にありて若宮がたの御指南を申し上たるスザーヴアデヰー婦人なりと女皇新聞に見ゆ

○かなのくわい　にてハ益々盛大に赴き是まで「かなしんぶん」といふを毎月二回づゝ發行せしを今度改めて會よりハ「かなのてかゞみ」といふを發行し「かなしんぶん」ハ別に有志の人々が引受け度數をも增して發兌することゝなれり扨て「かなのてかゞみ」の第一號ハ既に發兌になり有益の記事論文甚だ多き中に「かたかなの古き傳」といふ一篇ありて之ハ左まででにハ思はざれども其畢りに「此次に聲の出る態に依りての

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たゐんな五十字を作りさる說云々ハ略す」とせられたるが聲の出る態によりて五十字を作りたる說とハ如何なるものにや博言學上の參考ともなるべきものにや見まほしゝ

○日本婦人纂論　ハ井上直女史の編纂にして女風改良に適切なる時論を集めたるものなれバ必讀の書物なり博文社丸善等よて發賣せり

○學藝雜誌　の第一號を淺草區元町二十四番地の贊育社より發兌せり專ら學術上の事を記し諸名家の論說等もありて同社より發兌の敎育雜誌と〻もに好良の雜誌なり

○急告　從事とても本誌發兌の期日を誤りたる事ハ餘り無之處先般紙面の改良に着手せし以來ハ別て期日を違へず早朝より配達致し居れば万一遲達等の節ハ速に御報知被下度候

◎學藝一斑

○水の事（前號の續き）

第六。大陽の沒後地球より熱を發散することの速かなるを考へまた草のあるところハ草のなき地面よりも熱を發散すると甚だ速かにして樹木もまた幹よりハ葉の方が早く冷氣を受くるなどのとを考ふるときハ露の降るが爲めよ濕氣を受くるとハ草を生せざる地面あるひハ樹木の幹よりも草および木の葉に必要あるを知るべきなり此れ樹木の下またハ曇りたる夜などに露のなき所以なり

第七。水塵となりて騰りいさゝゐなる溫度の下降により水となるなどの現象ハ甚だ驚くべきとよしてこれまた自然のあり樣におゐて空氣中他の原素を保維するところなり（完）

○理學一斑

〔第十一節〕理學即ち硏究實驗推論等よ由て得たる自然の定則の智識　事物に就ての普通の智識と理學上の智識またハ普通の推論と理學上の推論との間に境界線を引きて區別をなそいと六かしきとなり嚴密にいふときハ總て正しき智識ハ皆「理學」にして總て精密なる推論ハ皆理學上の推論なりといてざるを得ず「硏究」および理學上大なる結果を得とところの「實驗」の法則ハ人々日々生活上の事と少しも異るところなく只その精密なるのみの事なり小兒が新しき玩物を得たるときハろの物質を考へ常にろの物に就て實驗をなそが如く我々もまた彼れゐ是れかの一物に就き絕えず硏究をなし實驗を積みつゝある事なり

然れども未だ精密なる硏究をなしたる事なきものハ六かしき

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

事なりとして驚くべし最も普通の事柄につき假ひ眞正に精密ならずとも稍々精密なる說明をなし得るものは百人中一人もあらざるべし言を換て言へば一事物を擧て之を示すとも尙は他に眞正の事物あるを知らざる事あり裁判所に於て双方とも誠を申立つるもの突合吟味を受くる事ありとせんよその一方或は双方とも只自ら見たる事のみに由て推度を述べ立て混雜極まる事ならん甲は乙ころおのが懷中ものをすり盗りたれ何となれば乙が甲よ近よりたる時おのが懷中に手の觸れたるを感じたりとて自ら知り得たることのみを以て云ひ張るべし然るに乙は全く盗みゐるものにはあらずして丙なるものありて之を盗みたる事をば甲は推究じ得ざりしなり未だ研究よ慣れざるものは皆斯く見たる事のゑに由り推究を混ぞる事なるが既に研究に慣れたる者とても尙は此誤謬に陷る事なしとすべからず

〔記者曰す歐米の婦人には草花を愛するもの多く或は庭園よ灌養し或は野外よ品標を集むる等の事は精神を樂ましめ身躰を健かにするの益ありされば次號より此理學一斑と隔號に植物學一斑といふを揭げ時々草花の圖畵をも挿入すべければ豫めこゝに報告する者なり〕

◎ 對譯

○泰西箴諺の直譯

(甲)㊀知らずに㊁ある㊂可き(は)㊃惡しく知て㊄よりは㊅より善く㊆ある

(乙)㊀彼處に㊁生命(が)㊂ある('s は is の畧)㊃間㊄彼處よ㊅望み(が)㊆ある

(丙)㊀毛㊁賣人が㊂毛㊃買人を㊄知る

MAXIMS & PROVERBS.
泰西の箴諺

(甲) To be unknown is better than illknown.
㊂ ㊁ ㊀ ㊆ ㊅ ㊄ ㊃

〔意譯〕半可通よりは寧そ知らぬが勝し

(乙) While there's life there's hope.
㊃ ㊀㊂ ㊁ ㊄㊆ ㊅

〔意譯〕生きて居る間は望みあり

(丙) Wool sellers know wool buyers.
㊀ ㊁ ㊄ ㊂ ㊃

〔意譯〕毛を賣る者が毛を買ふ者を知る

AKIBITO TO DAIMYŌ

Tuziurino komamonoya ga tochū nite yūdachi ni aite komaru wo daimyō ga mite, "bakana yatu da,—kangae no nai mono da, naze amagu-mochi wo turenu zo!

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎列女傳

○尼松月の傳

昔くれ竹のふし見の里に松月といへる尼草の庵むすびていと殊勝よおこなひすましけり親ハ京都のさるべき處に宮仕へして和漢の學び武藝にも至り深かりしかばこよなき者に召しまつハし給ひしを同じ殿人の何某が嫉妬の餘りさま〳〵に讒言設けてあしざまよ申しなしければさばかり寵遇あつかりしも疑ひ惑はせ給ひて終に御前を遠ざけられしを口惜しうも果敢なうも思ひ歎きて我身につゆ覺えなき寃枉のよしを詳細にのきとゞめて刄に伏てみまかりしのハ君ハ痛く悔い歎かせ給ひて腹黒き何某ハ追放ひせめてハ一人子の娘をだに後見して世に出し遣らむ然らずハ苔の下よも心安からじをなど懇篤に仰せられしかど母刀自も亦ひとふし殊なるそぐれ人なりしのば固く辞み申して亡夫の身に惡きとなしゝとゞに思知らせ給ハゞろれにていとうしろ安うなむ幼き者の上ハ豫て斯と思ひ定めつる事も侍れば只この儘に御暇たまはらむこゝろ願ハしけれとて毫うけ引かねバ物數多たびて請ふがまゝに許させ給ひしに聴で自らも娘も某寺院に入りて尼となりつ斯て伏見の里の知るべの方に移りしと聞傳へ給ひていとあはれに思して草庵いとなみ建て賜ひつ娘の松月尼ハ母の尼老の後に身まかりし跡をうけて旦暮の勤行怠らずつとめしかば里人も難有ものに尊びもてはやしつゝなき人の後のわざ營むをりハ更にもいはず經よませ非時供養するなど絶ずありけり或年夏の初めより雨いと稀に照り續きて田なつ物枯れ果なむなどうち歎きしに八月の末頃より降りはじめて十日餘り霽間なかりしかば河々皆溢れて畑ものも浪の下艸となりぬるに人々の歎きたとへむ方なく八大龍王雨やめ給へとのみ打踊さるゝほど山々の落水日にそひまさりつゝ杣木の渦卷く浪にゆられゆくなどを見るにも水上ハいかばかりかと問まほしき体なるに堤の崩れたるハといふ程しもあらず大きやかなる家のたちながら流るゝ家上に人ののきつきて救もとむる聲さへ枯々なる或ハ松杉の梢にとりつきて傾きながら漂ひゆくなど淺ましき事のぞへも盡しがたく寺々よううち鳴す鐘のこゑ村々よ吹ろらる貝の響きなど水音にたぐひて恐ろしう聞ゆるにこの松月尼の庵ハ小高き岡の上にあれば些も難なけれど里のかたひく家々の床上まで水湛えて竈に蛙もすみぬべき体なれば調度とも船にて運ぶもあり老人女の童なとハさるべき方に立退するなど晝夜わかず騒

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ぎのゝしるさまこの世のらなる地獄のやうなれば蒔繪の小唐櫃夜のものゝ包ミ蔀遣戸の類ひ美ハしと見る物も汚くげがしと思ふ物も涙のまに〱漂ひ來れど誰のハ目にも留むべき親ハ子を尋ねて船に呌び妻ハ夫に引き別れて岡つゞきさがしもとむるなど見るだに悲しく斯くながら世や盡ぬらむと驚き歎かるゝに尼ハ懸樋の水の清きをわらせる器どもに汲た先て乞ふ人のあるまゝに取らせ或ハ飯炊きて餓ゑる者に食せなど力の及ぶ限りハ救ひま心つくせるもいとたふれしまの庵の近きわたりに住む傳作といふ男ハ是と定めたる活業とてもなく小鳥網はりて鳥をとり河がりして獲たる魚を賣りなどもすれどそを常の業とするにもあらず人と

五百五十五

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

爭ひごとして道ならぬ物を得遠き國よりかどひ來し人の子を買ひて河竹の流れに沈めろの身の代をとりなど良からぬとのみするゑせ者なればこの洪水に流れくる調度どものよしと見ゆるハ綱うちかけて淺き方に引寄せ〳〵取揚ると數知らず我爲にハ福海とこそいふべけれなど悦びつゝ走り廻るを誰かハ憎しと思ハざらむ爪彈きして謗れど耳にもとめず彼方此方とよき物尋ぬる處へ黒塗の長櫃の流れ來るを見るよりこハ衣櫃にこそと棹とりのべて搔き寄せつゝやをら引あげつ急ぎ蓋を開き見れば衣にハあらで齡七十ばかりの嫗の人から卑しからずよき衣着たるがかた息になりて入り居るに傳作ハ驚くとれはかたならずよき衣ならむと思へばこそ辛うじて引揚もしつれおのれの如き者を何よかハせむと打腹立ちてやをらもとの儘に蓋おはひてわりし流れに沈めむとせしを遙に見とめたる尼ハ覺えず聲をあげてヤヨ待給へといひもあへず足を空に走りつきて傳作の手に縋りつき何處の如何なる人の遺骸よもせよ目よ觸れ手にかゝるハ前の世の由縁無きよハ侍らじを流し棄むハいと情なく罪深からずや懇篤に看護て息いでぬべくハ救ひもしてむ若し斯て見果なば後の世をただに助けぬべし枉て尼に委せ結へかしと涙ながらふよかきくどけハ此方ハいと不興げべるさましてこの嫗を生すも殺すもおのが身に取りて毫の德つくべきものとしも思ひたらねバ委せよとわらば委せもせむ然れど後に悔思ふとありとも其ハおのれが與り知るとにハあらぬを能く心得て兎も角もせられよかしとて尼が手に渡せバ返す〳〵悅び思ふよしを告げてやをら櫃の內より出して肩に打懸けつゝ庵のうちへ引入れつ濡れたる衣ぬぎかへさせ藥り含ませなどして勞ハる程に漸に我にかへりて數度尼をふし拜みて悅ぶと限りなければ尼もまゐ伴ひ歸りたる甲斐わりとてありしことども語りてうち悅びつゝ此處ハ伏見の里なるがいづくよりか漂ひ來ませるよしや五里十里の遠き境なりとも送り歸しまゐらせむことハ難くもあらじをなど先づ懇ろに問ひ聞けば嫗ハ涙拭ひあへず暫時ハ荅へだにせでうち泣きてぞありける（未完）

◎雜記

○毛髮の事

我が邦の婦人の毛髮ハ歐洲にても貴婦人の羨しく思ふ所なるが彼國にて我が邦の髢を珍重すること一方ならざるを以ても知らるゝなり余輩彼の邦の諸新聞雜誌にて屢々見受るところなり生れ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ながらにして斯くも貴き毛髮を所持しながら鍋蓋のごとき不体裁なるものを頂かんよりは速に束髮と改め固有の美を歐洲に誇らんことを余輩希望して止ざるなり扨て毛髮の裝飾もまた一種の美術に屬するを以て折々は毛髮の事を研究し置も又聊の益なきにあらざるべし幸ひ毛髮の事を委く記したるものを得たればこれを譯して婦人方の參考に供ふべし

毛髮に意を用ふるとは際限もなき事にて古代にありても毛髮裝飾の美術の進歩したりしは實に驚くべきほどにて羅馬人は早くより假毛と眞毛とを交雑へて繩のごとくなし或ひは假毛を頭の皮に粘り附けまたは我邦の附け髷のごとく假毛を以て兜のごとく作りしを頂きたるなどのこともあり或ひは又その爲に作りたる篦を以て毛髮を縮らせて卷きつくるなど好に隨て種々になし香水を注ぎ金銀珠玉、緞、花冠などを以て飾りたりグリーキおよびジユーの婦人もまた羅馬人と同じく早くより毛髮に意を用ひたりしと見えコムモドス帝は金粉を毛髮に振り掛けて髮の間に燦爛するを喜びしといへりエドワード、ビオット氏のいへるには黒髮人種なる支那人中にても古代より髮色の異る歟あるひは混じたるものを忌み厭ふ事甚だしかりしとぞ

灰色および赤色の毛は毛髮中最も粗大にして黒色の毛は之に次ぎ鳶色の毛は細かく亞麻色の毛は最も細かなり西班牙國よありては赭色の毛を最も美なりとするが故に赤色のものまでも尊み暗黒なる顔色のものには赭色または赤色の毛多しとて田舎などにては常に暗黒の顔色のものを好むといふまた古代の好尚を知るには古代の詩歌中に青眼(ブリユー、アイ)金緑毛(ゴールデン、ツレッス)といふことあるを以ても知らるべく羅馬帝室時代にありては貴婦人は多く黄色の毛を好みしとてローンあるひはダニユーブ河の近傍より黄色の毛を以て製したる髭を輸入したる事夥しかりしといふ

頭髮一本の厚さを平均すれば一インチ(凡そ曲尺八分)の四百分の一にして發生の割合は一週間に一ライン(凡そ曲尺七厘)一箇年に六七インチなりといへば一箇年七インチ發生すると假定せば五十年間には凡そ三十尺の長き頭髮となるの割り合なり

○造作なし貸家(西洋家屋裝飾の心得)つゞき

家屋を裝飾しおよび家具を取揃へる中に是非とも一通りは揃へざるを得ざる種類あり不經濟を顧りみずとせばいふも詮なきとなれども經濟上よりいふときは料理用具と寐臺用具とは

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

乃ちこの種類の中にあり料理用に必要なるものは必ず一通り揃へて渡さゞれば如何なる上等の料理人といへども決して氣に叶ふやうに食物を調ふると能はずまた寐道具の不良ぬときは身体休息のときに當り不愉快を感じ健康上に害ありとす然るに不幸にもこの二種の用具は殊に高價なるものにて初め買用を要するとも後に至りては必ず眞正の經濟となるべけれども荒世帶の時はこの二種に費すこと甚だ大儀なりまづ寐道具および料理用具を買ひ整へたる次ぎには食室の用具飾り附を整ふべし今は幸にして上流社會にて欅の細工物およびモロッコ革の流行廢れたれば古具屋に至り出物を買ひ揃ふること左まで六かしきとにはあらざるべし然れども安物のみに心掛けずして「金の價は何時にても金なり」といふ俚諺を忘るゝことあるべからず何品を購ふにもよく〳〵聞き合して正直なる店に至りて購ふべし（以下次號）

○反古曝

言ふと行ふと心と言と表裏あかるべし万づの事いみじくとも誠なくんば玉の盃のそこなきが如くなるべし（大和俗訓）

世は海なり身は舟なり志しは楫なり楫をわしくとれば行べきに行かず風波にあへば舟くつがへるが如し（同上）

○源氏の物語譯解　　半可通人

小説を讀て其作意を評し人情を語るなどは婦人の交際上いと相應しき談柄たるのみならず識ず〳〵文學美術の境に進み入て心思を高尙ならしむべし然ども我邦近き世の小説には讀むべきもののいと稀なり中昔のほどより物語といへる一種の書出來てより盛むに上流社會に行はれたりしが年月の移行くに隨ひ言語も文章もいたく變りて俗間に通じ難きまでよ成行き僅に和學者の翫ぶに止り廣く世に行はれず成行ぬそが中に源氏の物語はしも世に持囃されし書なるが故に註解せる書ども多かるを是彼三四種取合せ比べ見て自ら當りと思ふ説を集め鄙見をも雜へて譯解し未だ此書を讀まざる人々に其大意を示し且つ作者の才識と當時の人情風俗及び和文學の一斑をも知らしめんと欲するなりされど通人元和學者にもあらず一箇の洋學生に過ぎざれば洋學の心もて解したる所多かるべく和學者の心よ叶はざるは和學者の說の通人の心に叶はざるが如かるべし然ども其大旨に至りては大なる違ひあらずと信ずるなり

桐壺の巻

昔し何れの御時にかありけん女御更衣（女御は后に次げる女

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

官にて更衣は又その次の女官なり此局にて御衣を召更るゆゑ更衣といひ御子の出生ありてよりは御息所といふ」あまた宮仕へし給ひける中に極めて位高くやむごとなき分際と申すほどにはあらざれども人にすぐれて帝の寵愛を蒙り時めき給ふ更衣ありけり他の女御更衣たちの素より我こそは寵愛を得めなど自ら思ひ設け給ひしをこの更衣の寵深かるを見てさるまじき事に思ひ冷眼じきものに陥しめ妬み給ひ此更衣と同じ等或は夫より下れる更衣たちは況して心安からずなべて朝夕の宮仕へにつけても心を動かして人々の恨みをおふとのつもりたるにやありけむ此更衣疾病重くいと身弱くなりゆきもの心ぼそげにて更衣の里の母君の許に引籠りがちなるを帝はいよ〳〵飽かず憐れなるものに思して人の譏りをもえはゞからせ給はず世の例にも引出ぬべき御もてなしなり公卿殿上人なども何となく目を側めつゝありければいとまばゆき御覺えなり 唐にてもかく殷の紂王が妲己を愛し周の幽王が褒似を寵せしが元の起りとなりてこそ世も乱れてあしかりけれと漸々に世の人々も無道なる御ゑわざのなど心を惱ましもて煩らひ唐の玄宗が楊貴妃を寵愛なしたるがゆゑに安錄山の乱も出來たる例など引出づべきほどになり行よぞ更衣はいとはしたなくひがめらるゝ事など多かれども辱じけなき帝の御心のたぐひなきをのみ頼みにて交はり給ひけるさて更衣の父よて在す按察大納言と申すは嚮きになくなり給ひて母なる北の方のみぞ在すなるが此方は元由緒ある人にて更衣の父はなくなり給へども兩親うち揃ひさしあたりて世の覺え花やかなる方々にも劣らず萬づの儀式をもてなし給ひけれど後見ともなるべき確とした親戚もなければ事ある時などは尚ほさらに據るべなく心細げなり斯くて帝と更衣との御中らひは「君と我といかなる事を契りけむ昔しの世こそしらまほしけれ」といふ歌の心も思ひ出られて前の世よりも御契りの淺からざりしにや世にも稀れに清らなる玉のごとき男子御子さへ生れ給ひぬ帝はいつしかと心許ながらせて急ぎ若御子を召寄せ御覽ずるに珍らかなる稚兒の御容なり一の御子(朱雀院の事)は右大臣の女にて在する女御の御腹よ生れ給ひたるなれば外戚かたの威權重きがゆゑに疑ひもなく東宮よ立ち給ふ儲の君と世にもてかしづき申せども此若御子の容色の艶美あるにはならび給ふべくもあらざりければ帝も一の宮をば一通りやむごとなき御思ひにて此若御子をば大かたならず愛でいつくしみ給ふこと限りなし(つゞく)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎新作物語

〇巣守の妻　第四回　　春のや主人稿

去程に小杜の越野ハ、思はぬ物語を聽くにつけて「ヨモヤ温厚いアノ伜が、如何して其樣な滅相なことを、……若氣の出來心……よしんば若氣の誤にもせよ、下宿屋の娘などを、なんで謹直なアノ新作が、どうしてそんな樣な事があらうぞ、シカシそんな樣に一概にもいはれぬ、どうやら新作のこの節の素振が、万一この事が眞實であらば、卑しい女などに手を附たとが、不實に置去りに……イヤ〳〵性來内端な伜、そんなその樣な不面目な事を……もしや奸物が糸を牽いて、たしかにその娘を人形に使ッて、……それを氣心も知ッて居ながら、陳腐な口實を眞にうけた瀧口、ホンに御内方の氣がわからぬ、見す〳〵口實とされて居るのに、サモ眞實らしう信切めかして、……あんまりこの越野を踏附た言分、そんな不心得な子ハ持ませぬ、人の伜の事餘計なお世話、御自身の長女、四ッ五ッからコマシヤクレタ性、どんな蓮葉者にならうもしれぬ、チト氣を附さが……エヽ寧そいふて遣うか、イヤ〳〵好求んで如斯事を、何で御内方がいふて來やうぞ、此方の名に係ると思へばこそ、よしんばこの事ハ虚であらうと、その志しハ嬉しい譯、ヨモヤと思へども伜の胸も、トックリ聞いて見ねば解らぬこと、けつしてその樣な事ない筈なれど」ト越野の胸の中ハモヤ〳〵ゴタ〳〵、氣を揉んで見たり腹を立て見たり、しばしハ皺んだ眼を見張ッたまゝ、彼方の貌ばかりキッと詠めて、一時ハ額際に筋さへも見せて、無言で膝頭を掴むだ容躰、此方の御細君ハ氣味わるわる、「万一大黒屋の宮城野氣取で、ウーンとこの儘に背の方へ、これハ大變ぞ」ト眼をキヨル〳〵、湯盃を探しながら「シゴキ」に手をかけ、直にも解うといふ氣込擧動、おのれが恨めしう思はれたを、秋毫も知らぬとハ佛さまなり、越野ハやう〳〵に氣を落附「わざ〳〵遠方を御親切に、まことに忝ない此れ報道、私の伜に限りまして、大丈夫そんな事ハ、ヨモヤ決て、マサかあるまいとハ思ひますが、何をいふも若い者の事、いづれ歸り次第……けふハ同縣の官員の方へ、彼方から呼れまして留主中ゆゑ、何れ歸り次第聞正して、早速御返辞をしませう程に」

〇此方の御細君ハ呆れた貌附、「テモマア他人事かなんぞのやうに、後程お返辞をしませうとハ、アンマリ信切を外にした言分、それなら御勝手になさいまし」トいはぬばかりある面地して、流石のお多辨も口をつぐみ、舌まで浮み出る話柄を嚙みし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

め、頰をふくらしての辭別「さよならお邪广さま」ト立歸りぬ入違へて勢ひよく、門の戶毀すやうに手荒ゝ引開け、駒下駄威勢よく蹈ならして、外より歸り來る伜の足音「ア、あれだものを、輕躁しい、まるで五ッ六ッの小兒も同樣、モスコシ氣取ッてゞも步けバよいに、あれだもの情事が、どうしてろの樣な大膽な事が」○母ハ子の事で氣ハ有邪無邪、新作ハ勇ましげに、奧の母の居間へ鳥のやうに飛こみ「慈母〳〵」「エ、吃驚そる、騷騷ゝしい」「デスガチ、慈母、喜んで下さい、實に……實に嬉しい事が、……けふ行ましたらチ、洋行……洋行する事に、ナニサ田河さんの周旋で、例の大臣のお伴をして、僕も……私も亞米利加へ……ナアニさう極

五百六十一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ッた譯じやアないが、モシ志願ならば願ッてやらうト、ハア田河さんが、エ、何日から、たしか……モシ行けば來月のはじめに、エ、年限、借か一年か一年半だが、頼めア三年の四年位、エ、長い、何長い事がありますものか、長くて惡ければ一年半に爲ませう、慈母か御承知なら、直に此足で往て來るから、ナアニ田河さんへサ、母も承諾だといふ事をサ、チ、慈母宜いでせう、これを承諾トいつて下さらなくちやア、僕……私の前途の望が定らん、是非これハ、エ、宜しい、Thank God(ありがたい)今より三年を經ない間に、慈母必らず御安心をさせますから、「チイ〳〵新作何處へいくのだ」「ナニ少々買物に、洋行の準備を……」「マア一寸待なヨ、準備ハその樣に急がずとも宜い、それハ何よりの芽出度事だ、妾ハ段々に老年だか、さりとて老朽た身體でもなし、貯蓄も少々ハある、四年や五年間ハ困りもすまい、官費で洋行とハこの上もない事、定めし嚴母君がお存生ッたら……さういふ立身の際であるゆゑ、成べく惡い名がたッてハならぬ、ヨモヤと思ひますが……新作、もしや大阪に居ッた頃に……チヤをのしな貌をしてモヽヤお民とのいふ娘を……驚くのハ知ッてゐるのか、それハ又如何……如何いふ譯で知ッ……イヽヤ藏しだてを……十分事譯ハ知てゐるが、お前の口からも聽うと思ッて……下宿屋の女といふことも、お前と……ヨモヤその娘をお前が誑して、……」〇あとハいひかねて眼をうるまし、キット伜の貌打まもれば、此方ハ穴あらば潛みたき風情、生得正直なる持前とて、時々そのことの露はれぬうちハ、虚言を吐してともありしならんが、一旦このことハ事實であらう、ト圖星をさゝるれば藏すこと能はず、たちまち白狀する順良なる質ゆゑ、(消極の虚言ハ吐かぬにあらねど積極の虚言ハ甘んせざるゆゑ)たちまちその面を紅ゐにして、しばらく愧入りて默然たりしが、やがて少しばかり頭を擡げて「まことに慈母、實に面目もございませんが、單に風說ばかりお聞なすッてハ、如何にも私の淫佚のやうに……いづれにしても面目ないお話、不所存にハ相違ございませんが、これにハ幾分の譯もあること、全体その娘と申しますハ、……アノお絹といつた蘆田の女、サアその蘆田ハだん〳〵と落魄、竟に靜岡から名古屋へ移ッて、其處でうち揃ッて病死をしまして、それから引つゞく辛苦艱難、聞けばきゝますほど憫然に思ッて……互ひに思ひがけぬ昔し語、ツイ……」トいひかけて口隱る新作、母ハ口もとを「へ」の字にして、宛然「安八」の人形のやうに、目ばたきもせねば動きもせず、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◎家政要報

◎主婦の心得　茲に主婦といふハ其家の客人に對していふものなり一家の主婦たるものハ取りも直さず一家の交際官たるがゆゑに來客に對する心得ハ家事取締り上最も重く最も必要なることあり今クヰーン新聞に主婦の心得と題して掲げたるを見るに風俗の異るが爲めにそのなす所ハ多少相違あるべしといふもその心得に於てハ更らに我が邦とても變る事あるべからずと思ふがまゝ左に之を譯出す

主婦にも種々ありて能く事に慣れ万づに如才なく客に對していと心切にして愛情深く速に物事を取扱ふて毫しも滯ることなき良主婦あればまた來客に對するなどの事ハ一向に考へず客間とていつも取散らしありて家事向の取締りも無かしと思へるほどに万事に不注意なる主婦もありされば客に對し良き主婦たらんと欲すればまづ第一に家事取締りに注意し召使のものをよく敎へて來客に麁相なるハ主人に麁相なるよりも一層重き事なりと心得さそべし誰にても客となりて人の家に留るときその家の召使が朝ハ遲くまで來らず湯ハ冷く火ハいつも消えたるまゝ(彼の邦にありてハ煖爐の火をいふなれども我邦にてハ煙草盆の火或ハ風呂の火と心得べし)になしおき臥床の掃除行屆かず靴をも、よく磨かず寐臺の掃除ハ殆んど午頃までも放棄てあるがごときハ誰しも心持よく思ふものあらざるべし客たるものハ譬ひ心に不愉快に思ひろの家の主婦ハ婢僕等の怠りにお氣が附れずにあるなればこれ等の事を告げ知らせ度しとさへ思ふとあるもさりとてまさか主婦に赤面さする業なればとてさし控ゆるものもある事ならん斯のごとき不愉快ハその家の主婦が病身なるか或ハ自ら放恣なるかの故にて平常召使の婢僕に示し方行屆かず婢僕をして來客の欵待に意を用ひしめざるが爲めなり來客の時ハ召使のものにて能く意を用ひなば朝餐まではハ主婦ハ客人に接せずして自家の用事をなすも妨げなしまた客室の事を引受け万事行屆くほどの良き召使あらざれば主婦自ら各室を見廻り聊かの事までも不都合なき樣一々意を注ぎマッチ箱にマッチの有無を撿し(我が邦にてハ煙草盆の火)蠟燭立に蠟燭机上にてハインキ壺にインキ(我邦にてハ硯箱の水入れ)紙狀袋等の有無を撿し最後に召使を呼ぶ機械の(鐘なり)損じなきや否に至るまで殘る方なく氣を附くべし(以下次號)

◎白米相場　ハ十五日より一等一斗一升九合二等一斗二升七合三等一斗三升四合四等一斗四升六合五等一斗五升八合

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎御伽草

○作者びいき

貴孃ハ演劇ハお好で入らッしやいますかと問へばハイ好で度々見に參りましたと答へると一人の娘ハ側へより誰が御贔負だか當てみませうと福助でございませうチ、イ、へ、夫でハ松嶋屋か川崎屋の外ハ有りますまいとんへパイ、へ妾ハ誰より作者が一番贔負でございますといふと一人の娘ハ不審な面色でろの俳優ハ大阪から新上りの人ですか

○漢菓

ある好事家の菓子屋の主人が自ら引札をかいた文中に菓子ハ古く加艮久太毛乃と稱へ云々といふとの有るを其女房が側らから見てオヤ檀那むかしいうちの商賣も古道具屋も同一でしたかへと聞くゆゑ主人ハ頭を揮りナニそうな事があるものかと答へても女房ハ合點せず夫でも古くハがふくた物とゝなへとお書きなすツたでハ有ませむか

○藪に虎

割烹屋魚屋ハいふに及ばず惡疫騷ぎで困らない者ハ無が貴君方ハお忙しくて結構ですといへば醫者ハ頭をかき手數のかゝるばかりで一向利益にハなりませぬといふと問懸る男ハ微音で藪よ虎だからふ宜い理窟だが是も矢張見たて違へであつた

○數學問題

大小の二數ありその和ハ五千七百六十個にしてその差ハ大數の三分の一に同じといふときハ各幾何つゝなるや

○前號數學問題の答式

(甲)

$$360^{\circ}:24^{h}=135:x$$

$$x=\frac{24\times135}{360}=9$$

答九時

(乙)

$$1,20:102=2:x$$

$$x=\frac{102\times2}{1,20}=17$$

答壹斗七舛

(答者)筒井まつ、岩見茂敏、芝隱士、台山池邊、仕多艮四九次郎、下總松本みつ子、山本そゞ子

◎寄書

下野なる鹽原山の温泉にて讀める長歌

蘆野明日香

足引の山下り來れハ茜さす日ハはや落て墨染の夕の月そさやかなる思ふ君にし連れ立てば別れんとハ賤の女の刈る夏草の束の間も惜しくやハあらぬ玉鉾の道の歩みの遲かれと迭よ斷り蘆花ちる何ハのことを論らひ吉野の川のよきとハ流しもそてす惡木山あしき𡶌ぶり里ぶりハ枝葉も殘さず杣人の手斧にの

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

けて代り盡し時に後れず空蟬の世をも人をも益けんと國の大路の一筋に誓ひしとぞたのしのるかゝる君には逢なのら思の糸を繰り返し語らんよしはなよ竹の一夜明れば鳥がなく君は東都に天さかる我は田舍に北南分つ袂ぞ悲しかる君殘は胸にみちのくの逢隈川のわふとはまたいつの日と走ら川の關の此方を詠めてば君は戀ふらん我もまた忍ぶか岡の走のびつゝ君に逢ふ日を待ちつゝわらむ

○婦人涅齒の由來(三十二號の續) 東京緒方正清述

源平盛衰記平家物語等を讀みたまひし人々は定めて熟知せらるゝことあらん一ノ谷の合戰に三位通盛薩摩守忠度等源兵の爲めに追擊せられしとて我は東兵なりと僞りたれども齒を染めたるが故に平氏の一族たる事隱ずに由なしとあり熊谷直實が敦盛を組敷きて兜を取り除け見れば薄化粧して齒を染めたりしとは稗史院本にもいふ所あり平家の一族公卿堂上方は當時齒を染めたると疑を容るべきにあらずろの后に至りては穴太記に足利義晴三好長慶の乱を避けて近江に走るの條に「かはぐろもまゐらせず」と書けり

如斯涅齒は我朝上古より既に一種の風習となれるものにして現に維新前までは依然として公卿堂上の方々にこの習慣を存せしと世人の知る所なり婦人の涅齒するは一度人に嫁する時は復た二夫に見えざるの表號にして此儀は孔聖の道に協ひ東洋の俗左もあるべき事ながら實は野蠻人粧飾の遺風よして彼の文身のことゝ殆んど同じかるべし男子涅齒の事もその主旨は婦人と一般にして貞丈雜記にも忠臣は二君に仕へず黑色變ぜさるを以て鐵漿をとあり又侍りたる人々は老若男女共に齒を黑うし玉ひぬなど記せるものもあり唯是れ官人の位階を表する爲なりといふ說もあるなれども何分覺束き事なりされば男子の涅齒は明治の初めに廢せられ婦人のは敢て禁ぜられたるにあらざれども漸くその數を減するの傾きあり文明の風に化せらるともいふべき歟或る人涅齒の風俗は日本のみにあらず太平海の諸嶋の中にもこれを見るといへりされば前の山海經文選の註などに出たる黑齒國も强ち我が國のことゝのみはいひがたし尙ほ閑を得なば涅齒の事につき詳說するところあらんと欲するなり

(完)

○螢照水草 遠州 小桃 女史

水草にすだく螢の影てりて光すゞしき袖の浦風

○驟雨 南總 荾木 半甫

急雨沛然暇半空、傾盆捲地氣匆々、前峰巳霽後峯未、架出斜陽長彩虹、

阪井石城曰驟雨眞景摸寫精到歎服々々

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

中外兵談

毎月二回發行●一冊代金拾錢郵税一錢●十冊代價郵税共前金壹圓

此雜誌ハ記事を數欄に分ち海陸軍事に關する論説、步騎砲工輜重の各兵科幷に航海水雷機關主計衛生等の諸學術に關する論説、新發明兵器類の説明、參謀の要務、將校の心得、歐米兵家の興論、隣邦の兵備、海外兵事雜誌の論説、名將謀士の格言偉行、軍人の傳記、交際の法、獨佛の兵語解、支那語學獨習法、軍歌詩歌戰記を記載せるものなり尚は号を逐ふて改良すべし●此雜誌ハ海陸軍人ハ勿論府縣廳郡區役所の兵事掛幷に中小學校の敎員生徒及國家の安危を憂慮する有志者の良友なり

●第二號（八月二十三日發賣）

（第二號目錄）

將來ノ事變ニ着目スヘシ●武功ハ文勳ト同視ス可ラズ●甲鐵艦ト水雷艇ノ優劣●涙速艦の圖●清國之栄事情●公使館附將校ノ資格及其機密探偵ヲ論ズ●露國の兵力●前哨軌範●英國海軍本部ノ組織●巨文島ノ説明●支那ノ砲兵侮ル可ラズ●清佛談判始末●グラシド將軍大勇美談幷圖●軍中一夕話二件●格言數章詩歌首●支那兵備ノ近狀●支那水兵ノ長崎ノ暴行記●長崎碇泊支那艦隊ノ砲力人員船種明●此外官報雜報數件

東京本郷弓町一丁目廿番地　中外兵談社

●詠歌詩賦 添削

月謝廿錢（郵券）秀吟者毎月連璧集に掲載す

東京九段甘雨館内　待賈堂吟友會幹事

●改良新法 言語寫眞法

自宅獨脩生六回募集●無束脩月謝卅錢●郵券二錢を投じ規則速呈す●●●東京牛込新小川町●●●傍聽速記講習會

橘守部著述 ●文章撰格

美濃判木板二冊　定價金九拾錢　七月發兌　郵便税金貳拾四錢

本書ハ祖父日本文章ノ正格ヲ論サン爲ニ古書ハ勿論中古近世ノ諸書ニ照シ反復論定シタル書ニテ尤世人ノ貴重セル書ナリ既ニ出板相成候長歌撰格短歌撰格ヲ合セ机上ニ備ヘ歌文ノ蘊奥ヲ自得シ玉ヘ

豫約者準備上等製本百部限リ豫約第三類ニ順シ金七拾錢ニテ差上候間御望ノ者ハ御回金可被下候通運會向拂ハ郵税御添ニ不及候得共御居處近傍同會社支店アルノ宿驛御示可被下候將又本集同盟者分ノ豫約ハ開板後速ニ遞送致候此段併テ御案内致候

●同詠共撰集講義録附屬廣告

本集初號以來殆ト六年間一月ノ休刊ナク一回ノ遲延ナキハ同盟諸君ノ情深ク篤厚キノ致ス處ト漸々改正シテ編輯シ來リシニ俄然方今出詠者ヲ減縮セリ尤悪疫ノ際故同盟中ニテ休詠ノ人モ少ナカラストイヘ𪜈亦世上不景氣ノ餘響タルハ論ヲ俟ス實ニ慨歎ニ堪ス依テ來九月出版ノ第七拾號ヨリ祖父守部講義本ニ供シタル書入ニ據リ古今和歌集講義録ヲ附シ益々歌學研究ノ旨意ヲ擴張セントス此段現員諸君ニ報道シ併テ同好者ヲ誘導アランコトヲ切望ス

明治十九年八月　本所松倉町二丁目七拾壹番地　橘道守謹啓

本誌代價表

	正價	此郵税
壹冊	金四錢	壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同 拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同 二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同 三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同 四拾錢

但シ東京十五區内郵税不申請

本舍は御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ雑誌配達不仕事に相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ郵券運便にて御送附あらんことを希ふ●郵通代用ハ壹錢切手にて一割増し●郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込み共爲替券と本舍へ御送附可被下候　但し東京十五區内ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

發行所　東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　續文舍

持主兼印刷人　松本義弘

編輯人　初鹿野鎚五郎

女學叢誌大賣捌

東京芝區愛宕町一丁目三番地　修正堂
同　神田區淡路町　巖々堂
同　神出區佐柄町廿一番地　東海堂
同　日本橋區新餃町　良明堂
同　牛込區肴町十七番地　活神堂
同　芝區愛宕下町二丁目　高槻堂
同　蠣売町貳丁目　信文堂
同　本郷區本郷元富士町二番地　盛春堂
同　同　本郷春木町　解明堂
同　牛込區牛込樂神町　積善堂
大坂府備後町四丁目　岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目　立興舍
山梨縣甲斐常盤町　内藤傳右工門
藝州廣島大手町一丁目　早速社
江州彦根西内大工町　新々堂
陸前國仙台大町四丁目　木村文助

驛遞局認可

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY